哀しみの涙

嶺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
哀しみの涙

【Ｎコード】
Ｎ２３４０Ｈ

【作者名】
嶺羅

【あらすじ】
最近よく見るようになった夢。その夢は灰原にとって、決していい夢ではなかった――――。※灰原を対象とした小説です。

第1話：夢

『ごめん…オレは……』

「やめて！！！」

声を張り上げてハッと目が覚めたその場所は、いつもと変わらぬ、ベッドの上だった。

ハァハァと荒く息を切らしながらベッドの上にいる灰原の額からは、汗が吹き出していた。

「またこの夢…？本当、嫌になるわ…。」

額から流れ出る汗を拭きながら、灰原は呟いた。

ここ最近、同じ夢ばかりを見ている。
しかもその夢は、灰原にとっては、決していい夢とは言えないものであった。

灰原は隣のベッドを見た。

（良かった…博士、まだ寝てるわ…。）

ベッドから降り、寝室を出る。
台所の蛇口をひねり、水をグラスに注ぐと、それをいっきに飲みほした。

「いつか、正夢になるのかしら…。」

灰原は一人ポツンと呟いた。

時刻は４時を指している。

空は早くも明るくなっていた。

「もう一眠りしようかしら。」

そう言ってベットに入ったものの、夢の事が気になってどうも寝つけず、やっと寝ることが出来たのは５時半を過ぎた頃だった。

第1話：夢（後書き）

どうも、こんばんは＊＾ー＾ｖ
また新たに新連載を書いてしまいました；
さて、あの頃（略）との両立は出来るかな？！笑

最近は新たにテスト期間に入ってきました。
また更新が遅れるかも？
それでも頑張って執筆するので宜しくお願いします♪
次は明後日頃の更新かな？とりあえず今週中にはしたいと思います☆
では！！

第2話：不機嫌な二人

「あーいちゃん！学校行こー？」

「ふあぁ…。おはよう。」

「おせーぞ灰原！」

「おはよ♪哀ちゃん！」

「おはようございます灰原さん。今日は一段と眠そうですね…。」

「えぇ…。」

灰原が眠いのも当然だった。
夜は遅くまで薬の研究をしていた上、夢にうなされて起きた後は、なかなか寝付けずにいたのだから。

そんな灰原とは裏腹に、元気いっぱいの歩美を見て、羨ましいのが本音だった。

「じゃあ次はコナン君の家に行こー！」

「ですね！」

「おう！コナン起きてっかなー？」

「起きてるに決まってるじゃあないですかぁー！元太くんじゃあるまいしー。」

「何だと光彦！」

「当たり前の事を言ったまでです！」

「アハハハハ！」

いつもと変わらぬ登校の風景。
歩美　元太　光彦達も、いつもと変わらず当たり前のようにじゃれあいながら歩いていた。
しかし灰原だけは何時にも増して気分が下がり気味。
そんな灰原に気づいた少年探偵団等は、精一杯慰めの言葉をかけた。

「哀ちゃん！元気出して！相談なら歩美がのってあげるよ？」

「ぼくものりますよ！だから元気出してください！」

「オレ、今日の給食のプリン灰原にやるよ！！」

「ありがとう、みんな。でも大丈夫だから…。」

少年探偵団の頑張りもむなしく、灰原の気分が盛り上がらないまま、探偵事務所についてしまった。

「よぉオメーら、今日は少し遅ぇーな。」

「だって哀ちゃんが…。」

「灰原？灰原が何かしたのか？」

「灰原がなんか今日元気ねーんだよ！」

「は、どーせまた遅くまで起きてて寝不足だから、不機嫌なだけだろ？」

「いえ、そうではなくてー…。」

「とにかく行こうぜ？学校。」

灰原の状況を知らないコナンは、そそくさと学校へ向かって歩きだしていた。そんなコナンにキレた灰原は、つい口を滑らせてしまった。

「誰のせいだと思ってんのよ…。」

灰原は蚊のなくような声で言ったつもりだった。が、しかしその声は、コナンの耳に届いていた。

コナンは一度立ち止まり、灰原がいる方へ振り返った。

「あン？オレのせいなのかよ？ってゆーか、やっぱり機嫌悪いだけじゃねーか。」

そう言い残して、コナンはまた歩きだした。

そんなコナンを見て歩美は

「今日のコナン君なんか冷たぁい…。」

などと呟いていた。

一方の灰原はと言うと、イライラゲージが徐々に上がっていて、今にも爆発しそうなオーラだった。そんな様子の灰原を、元太と光彦はただただ、なだめていたのだった。

実はコナンも、不機嫌だった。その原因は、蘭にあった。

そして、一方の蘭は超ご機嫌と言うことで、コナンもたまらなく面白くない気分だったのだ。

コナンの機嫌が悪い理由…
それは、学校帰りの蘭が帝丹小の門の前で、見知らぬ男と楽しそうに話していたこと。そして、挨拶をすませ一直線に蘭の所へ行くと、蘭がその見知らぬ男に、自分を紹介したこと。しかも照れくさそうに。

そして帰り道、蘭にあの男が誰かと問いつめたが、「秘密」と言うだけで、教えてくれなかったのだ。さらに今朝はなんだかいつもより上機嫌で……。

コナンは他人の機嫌に構ってられるほど、心に余裕がなかったのだ。

そして、機嫌が悪い二人と、それに戸惑う歩美　元太　光彦等５人は、帝丹小へと足を進ませた。

第2話：不機嫌な二人（後書き）

こんばんは、嶺羅です。
最近小説更新が軌道にのってきました。
が、しかし、ろくにテスト勉強していない私が、ここへ来てもいいのか・・・？！
と、思いつつ……笑
それで、テスト3日前くらいまでは出来るだけここに来ようかな～って思っています。
ですが今回のテストの偏差値が前回よりも悪かった場合は、ここにはしばらく来れないかも…。
なんでここにまた来れるように応援よろしくお願いしまーす＼（＾Ｏ＾）／～～ｗｗ

さて、今回の話はいかがだったでしょうか？灰原の夢はどんな夢なんでしょう？そして蘭と話していた男の正体は…？！それはお楽しみです＾＾＊

それではまた☆

第3話：灰原の決断

「みなさんおはようございます。」

「おはよーございます！」

小林先生と児童たちのあいさつが響く1年B組の教室。

朝の会が終わると、みんなは1時間目の授業の準備をし始めた。

しかし、みんなの行動から外れている者が2名…

その2人が今何をしているかというと、

一方は自分の好きな人が自分が居ないところで見知らぬ男と会っていたことと、それを隠している彼女に腹をたてていて、

もう一方は、その腹をたてている彼が自分の夢の中に出てきて、元気がない状態。

しかし、時間はそんな2人を待つことはなく……

「今日の国語は、みなさんに『詩』を書いてもらいたいと思います！」

「先せぇー、詩って何ですかー？」

「詩っていうのはね、自分の心で思っていることを作文とは違う書き方で文にしたものよ。…って言っても分かんないだろうから、今から先生の大好きな詩をコピーしたプリントを配ります。渡った人から見ておいて下さい。」

先生が、プリントを配りだした。
灰原は、プリントを受け取ると、後ろの席にまわした。

灰原は先生が好きだというその詩に目を通した。

その内容は……

「今から先生が今渡したプリントにある詩を読んでみるので、みなさんは聞いていて下さい。

『　　嫉妬しても
傷ついても

自分がおかれている状況が
どんなに辛くても

人は相手を思い続ける。

自分の想い人が

自分に被害がある最悪な状況に置かれても、

本当に相手を想っているのなら、

相手を許すことが必要だ。

人は人を認めることで成長し

人は人同士認め合うことで

互いに成長し

互いを理解し合える

人間の感情は

決して無駄なものではない。
人は感情があってこそ
真の人間になれる。』

これで終わりです。…難しかった？」

「…小林先生、この詩、自分で書いたでしょ。」

コナンが先生に言った。
灰原もうなずけた。

「えっ…と…。じ、じつはね…先生、頑張っちゃったの！」

「やっぱり…」

（そうだ…私、夢の工藤君に嫉妬してた…。だけど私の機嫌が悪いのは彼のせいなんかじゃなくて、私があんな夢を作り上げてしまったせい…。彼はなにも悪くないのに、彼にあたって彼を責めてしま

った…。私、どうかしてるわ。先生が作った詩（？）を聞いて気づくなんてね…。）

「ではみなさんも詩を作ってみましょう！まずはテーマを作ってね。原稿用紙を配るので、それに考えた詩を書いてみてください。」

「歩美は何をテーマにしようかなー？」

「オレはうな重の事を書くぜ！」

「元太くんは悩まなくたっていいですね、うな重があればｗ」

「あはは！光彦くんは何にしたの？」

「僕はまだ考え中です。」

「哀ちゃんは？テーマ、何にしたの？」

「えっ…」

いきなり自分にふられた灰原は少し戸惑ったが、しばらくして歩美の問いに答えた。

「私は……

今日思ったことを書くわ。」

「そっか！頑張ってね☆」

「ありがとう…。」

「う～ん…歩美は何にしようかなぁ？」

「あなたも頑張ってね。」

「ありがとう☆」

灰原は決断した。

自分に素直になる……

と…

第3話：灰原の決断（後書き）

手を出してしまいました…
PCに…
スイマセン；
でも、これからは期末に向けて頑張ります（ヽ・ω・，）q
それでは！

第４話：灰原の秘策？

笑いあった日々
泣きあった日々
喧嘩しあった日々
信じあった日々……

全てが大切な思い出で
全てが大切な日々だった。

大切なモノになったのは全て、
君が隣にいてくれたからだよ。

あなたが居てくれたから、ここまで頑張ってくる事ができた。

ありがとう。

…なんて書けないから…

せめて、“ありがとう”の一言は入れよう。

「…いちゃ…ん」

「あ…ちゃ…」

「哀ちゃん?!」

「…え?」

「どうかしたの?ボーッとしてたけど…。」

「何でもないわ、ごめんなさい…。」

「ねぇ、哀ちゃんはどんなの書いたの?」

そういって歩美が灰原の詩をのぞきこんできた。

「えっ…。」

「…これ…。」

「…！（まさか、工藤君が関わっているってバレたんじゃ…。）」

「この詩、すっごく哀ちゃんぽくていい詩だね！」

「え…あ、ありがとう。」

キーンコーンカーンコーン♪

予鈴が鳴る。

「はい、これで今日の1時間目の授業は終わりです！詩を書き終わった人は挨拶が終わったら先生に出してね。終わらなかった人は明日まで提出して下さいね。」

「「「はぁーい！」」」

挨拶が終わると、ほとんどの人が提出した。
そんな中、コナンと元太だけは未提出だった。

また予鈴が鳴った。
するとまたいつものように授業が始まった。

「次の時間はー…」

まだ朝だというのに、コナンと灰原はあくびをしながら窓の外を眺めていた。

今日の天気は眺めるにふさわしく無い天気の日だった。
それでも二人はただ心を落ち着かせようと、窓の外を眺め続けた。

――――しばらくすると、空は灰色に包まれ、『雨』と言う名の滴を地上へと降り注いだ。

「さよーなら！」

あっという間に時は過ぎ、時刻は3時になっていた。
下校のチャイムが響く中、灰原たちは廊下を歩いていた。

「なぁ、今日帰ったら博士ん家でゲームしようぜ！
本当はサッカーやりてーけど、この雨じゃあ出来ねーしよ。」

「いいよ！やろう！」

「じゃあ帰ったら博士の家に行きましょう！」

「コナンくんと哀ちゃんも行くでしょ？」

「私はパス。今日はやる事があるの。」

「オレもパス。オレもやる事あるから。」

元太たちは勿論、このあとブーイングを続けた。
「ノリが悪(わり)ー」だとか、「二人とも朝から変ですよ。」だとか。
しかし二人は動じたりはせず、ただただ無言で歩くのだった。
そうこうしているうちに、5人の足は門をくぐりぬけ、
分かれ道直前まで来ていた。

分かれ道まで来ると、いつものごとく、何も無かったかのようにして
3人は自宅方向へと帰っていった。
残された二人の間には、ただただ、変な空気が流れているでけで、
お互い口を開く様子もなかった。

しばらくすると二人の足は博士の家の前に着いていた。
すると灰原が口を開いた。

「…工藤君。何があったかは知らないけど、もし蘭さんガラミなら、
破局なんてところまで行かないで頂戴ね。」

「…何でお前がそんな事言うんだ?」

「何でもよ。」

「はぁ？」

「じゃあね、よろしく頼むわよ。」

そう言い残すと、灰原は自宅へと帰っていった。
コナンはそんな灰原の後姿を見送りながら、呆然と立ち尽くしていたのだった。

第４話：灰原の秘策？（後書き）

こんばんは＾＾
更新遅れてスイマセンでした。
今回は微妙でしたね；サブタイが；
まぁ、スルーして頂ければ…笑

え～…作者の小話でも入れていこうかな…笑×２
まぁ、あとがきにネタがなければ書こうと思いますｗ

次回は、灰原のやる事を解明していきたいなと
思っているところです。
次回も宜しくお願いします。
それでは☆

第5話：想わせないで

カシャカシャ

薄暗いその部屋には、パソコンを打つ音だけが響き渡っていた。

灰原はコナンと別れた後地下室へと入り、かれこれ2時間以上もパソコンと向き合ったままだった。

灰原は、解毒剤の研究を続けていた。
博士は休んだ方がいいと進めるが、灰原は聞く耳を持たず、解毒剤作りに熱心になる日々が続いていた。

「これなら……」

カシャン

エンターキーを押し、灰原は一息ついた。

「これでやり残すことはないわね。
これがもし失敗作なら、もう作ることは不可能だもの。」

そういって灰原はクスッと笑った。

「珈琲でも飲もうかしら。」

椅子から立ち上がった途端鳴り響いた携帯の着信は、コナンだった。

「工藤君…？」

『もしもし、灰原か？』

「えぇそうよ。どうかしたの？」

『いや、悪かったなと思って…。ほら、今朝灰原機嫌悪かったろ？なのに俺がそれに火に油注ぐみてーに灰原を怒らせちまったからよ…。』

「別にいいわよ、気にしてないから。」

『そ、そうか…。』

「えぇ。」

わざわざ心配して電話してくれるなんて…

ずるいわね、工藤君。

でも、これで最後にしないと。

もう、これで区切りをつけなきゃ。

彼には、やるべき事があるわ。

『んじゃあな、灰原。オメー最近眠そうだから、ちゃんと寝ろよ。』

「そうするわ。」

『じゃあな！』

電話が切れる。

そして灰原の瞳には、コナンのはにかむ笑顔が浮かんでいた。

カシャン

携帯が落ちる音が辺りに響いた。

崩れ落ちる体
支える力を失った足は、倒れ込む。

「どうして…」

掌を強く握りしめた。
爪が食い込み、一気に赤くなる。

「どうしてなの…？」

灰原の瞳からは、涙がこぼれ落ちた。

もう、後戻りは出来ない。

できないから――

「これ以上私を苦しめないで……――――」

これ以上、あなたを好きにさせないで……――――

第5話：想わせないで（後書き）

更新遅れてすいませんでした。
今回は、あまり長くなかったですね。
灰原が・・・かわいそうになって来た・・・ｗｗ
次回も宜しくお願いします。

第6話：抑えられない涙

「あーいちゃん！学校行こう？」

「えぇ・・・。」

今は、工藤君と会いたくない。

なんて思いながら家を出たら、そこにはいつもの工藤君の姿はなく、
吉田さんと児島君、円谷君の姿のみがあった。
風邪でもひいたのかしら。

「吉田さん、くど・・・江戸川君はどうしたの？」

「コナンくんは風邪でお休みだよ。蘭お姉さんが言ってたの。」

「そうなの・・・。」

正直言って、ホッとした。

今は、会いたくない。今会ったらきっと、私が私でなくなるから。
感情が、抑えられないと思うから。
――けじめをつけなきゃ。
私たちは、学校へと歩き始めた。
「きょうの国語の時間は、作文を書いて――」
私は、「また、文字を書かなくちゃならないの?」と、呆れ顔の表情をした。
小林先生のブームなのかしら。

「哀ちゃん、作文だって。最近文字書くこと多いよね。
こないだは詩だったし、その前はお手紙書きだったでしょ？先生のブームなのかなぁ？」

吉田さんも同じことを考えてる・・・。
やっぱり、ブームなのかもしれないわね。

作文は、先週行った遠足の感想書き。小学生の授業は、こういうものなのかしら。
私が小学生の頃は、こんなことしなかったわ。だから、少し新鮮でいいのだけれど。
でも、刺激がない。

いつも同じことを繰り返して、なんの変化もない学校生活。
決して楽しいはずがないのに、どうしてみんなは笑顔で毎日登校する事ができるのだろうか。
いつも少しずつ疑問が増えてゆく。けれど、何一つ解かれたものはなくて。

だけど今日、みんなが笑顔で登校する事が出来る源が分かった気がする。
――みんな、友達がいるもの。
だから、学校が楽しいのね。友達に会えるから。

――私は友達なんていなかったから、みんなの気持ちがわからない。
共感、できないの。

「風邪・・・」

ふと、頭に出た。
そうだ・・・工藤君、風邪ひいてるんだったわね。
だったら、丁度いいかもしれない。
あの薬をあげるのに・・・

「もしもし、工藤君?」

『・・・灰原・・・?なんか用か・・・?』

「えぇ。解毒剤が・・・できたの。今風邪ひいてるんでしょう？だから、丁度いいんじゃないかって思って。」

『そうなのか・・・。
す、すまねえ。解毒剤、持って来てくれねえか・・・？』

「わかったわ。」

世話が焼けるわね。なんて呟いたけど、本当はちょっと嬉しかったり。

「江戸川君、いる？」

3階に上がってみた。蘭さんと小五郎さんの姿はなかった。

仕方なく、自宅の方へ行ってみると、か細い工藤君の声が聞こえてきた。

「おぅ、あがれよ・・・。」

本当に辛いみたいね・・・。
こんなにひどいんじゃあ、熱があるんじゃないのかしら・・・。

「工藤君、あなた大丈夫なの?」

「多分な・・・。それより、解毒剤は・・・?」

「ちゃんとあるわよ。一応完全に戻れるように作ってあるけど・・・って、今戻るの?」

「あぁ・・・。だって丁度風邪ひいてるんだぜ?こんなチャンスはねえよ・・・。」

「そ、それもそうね・・・。でも、無茶しないでよ。服は？」

「・・・おっちゃんの借りる。」

少し心配だけれど、工藤君だから大丈夫よね。
私の心も・・・大丈夫よね。
そう自分に強く言い聞かせていた。

「灰原・・・飲んでいいか？」

「えぇ。」

しばらくしんとした空気が辺りにたちこめた。

かと思うと同時に、工藤君の苦しそうな声が響いた。
私は思わず耳を塞いだ。

「・・・工藤君、大丈夫？」

「・・・あぁ。」

ドアが開いて、『工藤君』が出てきた。
一応・・・成功？

「完全に戻れるようには作ってあるけど、元に戻らないとも限らないから、
しばらくは注意しながら生活してね。」

「おぅ、わぁってるって！」

工藤君・・・ご機嫌ね。
その横で私が辛い気持ちでいる事、あなたは夢にも思わないんでしょう？
やっぱり、あなたはずるいのね。工藤君。

「あいつ等に、ちゃんとしたお別れしなかったなぁ。」

「・・・そうね。
帝丹小にちゃんと転校届出すのよ。」

「あぁ、分かってるって。」

帰り道

私は泣いた。

声をたてずに。通行人に気づかれないように。

小さく、小さく。声を押し殺して・・・

泣いたんだ。

第6話：抑えられない涙（後書き）

1ヶ月、更新しなくてすみませんでした；
今回の灰原・・・前回の灰原よりも可哀そうだったかも（´∀`；）
ごめん！灰原！

第7話：強くなる。（前書き）

最終です。かなり見苦しいですが・・・。苦情は、受け付けております・・・。
覚悟有です。指摘してくださるとうれしいです。

第7話：強くなる。

工藤君が、学校に転校届を出した。
転校が決まった時、クラスのみんなは泣いていた。
ムードメーカーだった工藤君。
一か所だけぽかんと開いたその席は、
みんなの心にもぽっかりと穴を開けていた。

その穴はきっと、埋まることなど無いだろう。
工藤(えどがわ)くんはもういない。
もう二度と、戻ることは無いだろうから。
もう二度と、会うことは無いだろうから。
私の心のどこかにも、すっぽり大きな穴があった。
その穴は、どう埋め合わせすればいいのだろう？

「・・・哀ちゃん、コナン君はどこ？」

「江戸川君は・・・転校したのよ」

「嘘・・・だって、前までここにいたよ」

「そうだぞ、灰原。変な冗談はやめろよな」

みんな、未だに現実に向き合うことができないでいる。

小さな小さな心には、この現実を受け止めるには少々きつ過ぎた？
私は、つらそうなクラスメイトを目の前に、罪悪感を感じた。

私だって、辛いわ。
凄く。

自分から、突き放したの。
だって、彼がそうすることを望んでいるから。
彼を苦しめた私が、彼を縛り付ける権利はない。
彼を・・・蘭さんのところへ行かせてあげないと。

「・・・哀ちゃん」

吉田さんが私へ歩み寄った。そして一言私へ問いかけた。

「哀ちゃん、コナン君を好きだったでしょう？やっぱり、いなくなったら寂しいでしょう？」

「・・・何言ってるの？」

「だって哀ちゃん・・・泣いてるじゃない」

私はハッとした。気づけば私の頬には、涙が伝っていた。

私・・・どうして？
どうして・・・人前で泣くことなんて、自分のプライドが許さないはずなのに。ましてや、自分で泣いてることに気づかないなんて、今まで無かったのに。

「あ・・・」

「哀ちゃん、素直になっていいんだよ」

吉田さん・・・どうしてあなたはそこまで強くいられるの？
私なんて、自分から彼を突き放したのに、今更うじうじして・・・。
けじめをつけるって決めたのに・・・。
私って、何てもろい人間なんだろう。なんて・・・未練深いんだろう。

「・・・江戸川君、元気にやってるかなあ」

数日後の、吉田さんの言葉。

「大丈夫ですよ、彼なら。僕たちより強い人間ですから」

円谷君の言葉。

「コナンちゃんと食ってるかな」

小嶋君の言葉。

皆、私よりはるかに大人だ。外見とかじゃなく、精神が。
友達だからこそ。工藤君を、友達と思ってるからこそ、彼の決断に何の反論もなく、賛成して。見守って。思って。

――ああ、彼らの友情は本物なんだ。強く固い友情で結ばれているんだ。
そんな彼らが、輝いて見えた。

私にも、出来るかな。
言えるかな。

いつの間にか時は過ぎ、工藤君が居なくなって2週間が経とうとしていた。皆、立ち直り早い。それは、彼を信頼しているからね、きっと。

教室はいつもの雰囲気に戻った。教室の後ろには、前に書いた詩が掲示されている。
そういえば私、まだ見てなかったわ。
工藤君・・・私、あなたに向けて書いたのに、結局見ないで終わったのね。でも、私は書いて無駄だったとは思ってないわ。素直に考える時間が作れたもの。たった４０分間だけだったけれど、それでも、私自身の利益にはなったと思うわ。

ふと、吉田さんの詩を見た。吉田さんの詩を見た私は、驚きを隠せなかった。

「哀ちゃん、どうかしたの？」

「これ・・・・・」

それは、私に向けられたものだった・・・・・・

「これね、哀ちゃんを例えたんだよ。哀ちゃんに笑って欲しくて」

「え・・・？」

「これを書いてた時期、哀ちゃんあんまり笑えてなかったから。笑って欲しくてさ！」

不器用だけど、素直に書かれている吉田さんの詩。とても優しく、癒される詩だった。

題名は、『哀しみの涙』だったりする。

私、吉田さんの前で泣いたかしら・・・

「・・・吉田さん」

「ん？」

「私、吉田さんの前で泣いたことあったかしら？」

「泣いてるように見えたの。心が、泣いてた様に見えたの。
哀ちゃんは大人だから、人前で泣いたりしないと思うけど・・・」

子供って時々怖い。見透かされてるのね。
でも、なんだか嬉しかった。素直になれない私の事を、ちゃんと理解してくれたんだ。
そう思ったから。

「・・・哀ちゃん？」

「吉田さん。私、強くなるわ。誰にも負けないような、強い心を持てるように」

「・・・うん！」

この時私は、本当に心の底から笑えた気がした。

強くなる。
もう、揺るがないから。
工藤君を見返せるような女になって、驚かせてみたいわ。
なんて、彼が知ったら笑うかしら。
笑われたっていい。私が私でいられるのなら。
変われるのなら。強く、なれるのなら。

第7話：強くなる。（後書き）

これにて最終話にします。
凄く文章力がなく、とても見苦しかったと思います。
この小説で指摘してくださると、私も成長できると思うので、嬉しいです。
そして、それを機に文章力をつけていけたらなと思っています。
一応、リハビリとして別の小説を書いています。
そちらも指摘してくださると嬉しい次第です。

最後までありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2340h/

哀しみの涙

2010年10月10日02時05分発行